

## 「日系人」に見る内なる国際化・グローバル化

植田 麻記子

米国MIT留学報告

Japan MOT協会主任研究員・MIT (マサチューセッツ工科大学) 訪問研究員

### ■ 現代の日系ブラジル人 ■

日本からブラジルへの移民が減る中、ブラジルから日本への出稼ぎ、あるいは移民は増加しています。例えば群馬県の大泉町は、最大規模のブラジリアンタウンがあり、多くの日系ブラジル人が住んでいます。労働力の不足を埋める形で、ブラジルを中心とする南米からの出稼ぎ労働者が数多く流入し、三洋電機、富士重工などの工場に就労しています。その人口は町全体の約一割を占めると言われています。こうした地域では、実際に現実の生活の中で、日本人社会と日系人の関係が着実に形成されています。小学校のクラスの半分をブラジル人が占めることもあり、給食にはブラジル料理が出されます。実際に、幼少期から様々なエスニシティの多様化の中で育つことは、子どもたちの意識に大きな影響を与えるでしょう。かつての日本人が抱えてきた、外国人が「ガイジン」として、ひたすらに外部のモノとして物珍しく、それゆえに恐ろしいという感覚は、薄れていくでしょう。

日本で最も国際的な都市と言われて、六本木などを中心とする東京を想定する人も少なくないでしょう。しかし、実際は、日本のより国民の生活に根深いところに進む国際化は、まさにグローバル化の問題である移民という形で地方都市やその周辺で起こっています。そうした現代を捉えた富田克也監督の『サウダージ』(2011年)は世界中で評価されています。先進国の経済の縮小と若者の閉塞感、そしてそこに流入する移民のグローバルな波—現在の大量が言葉を獲得し、その存在を顕示する術として生まれたヒップ・ホップという文化によって、ゴーストタウンと化した地方都市、山梨県甲府市を舞台に、風前の灯の土木建設業者の若者、ブルジル人、タイ人を中心とするアジア人の外国人労働者たち、そこに起こる文化の衝突、差別、格差を抱えながらも共生するリアリティを描いています。ここに、現代日本のあらゆる縮図が詰まっています。富田監督は1972年うまれの39歳です。ぜひご覧ください。

### ■ 日系人と日本人 ■

日系ブラジル人の長年の努力は、日本とブラジル、あるいは南米諸国との間に強い信頼関係、あるいは少なくとも人的交流において特別な関係を築いてきました。移民が減少する中、また混血、世代交代が進む中、日本語教育も弱まり、日系ブラジル人はよりブラジル人としてのアイデンティティを強め、日系人コミュニティのあり方自体、問われています。しかし、近代史の中で、多くの日本人が海を渡り、過酷な環境の中築いてきたものを、日本人はより自覚的に背負うべきであり、別の言い方をすれば、もっと大切にすべきです。米国、シアトルで日系資本のスーパー、Uwajimaya (宇和島屋) の経営を成功させた日系アメリカ人二世の、トミオ・モリグチ (森口富雄) 会長は、日本からアメリカに来るビジネスマンは「もっと日系人のアドバイスを生かすべきだ」と、発信します。同会長はビジネスのみならず、現地の邦人紙・北米報知 (The North American Post) の発行や、日系人の高齢者福祉の観点から生まれたNPO、日系コンサーンズ (Nikkei Concerns) の運営などアメリカの日系社会でのさまざまな文化、福祉活動にも積極的に関わってきました。その森口会長は、日本からのビジネスマンが日系人をあまり尊重せずに、交流を図ろうとしないことを歯がゆく見ていたといいます。例外としてSONYの盛田昭夫氏、紀伊国屋書店の松原治元会長を挙げ、とりわけ松原氏が日系二世の財務担当者を雇っていたことで、不当な価格での不動産購入を免れたエピソードを紹介しています。

「もっと日系の意見を聞いてくれればいいのに」シアトルの日系スーパー、宇和島・モリグチ会長

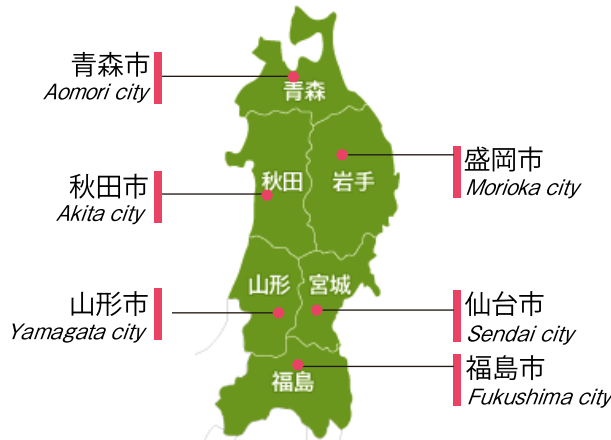
JB Business, 2012/07/31

(<http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/35763>)



from **Brasil** コロニアの想い伝えに 聖市にて 結団式

## 『東北応援ツアー』in 2012年



趣旨：東日本大震災の被災者への支援、被災地の復興への一助として、私たちは義援金募集活動を行ってきました。そして被災地の状況、被災者の心情、悲しくも犠牲となられた方々に、遥かブラジルの地より想いを馳せております。

この度、被災地の実情を実際に現地体験し、被災者の気持ちに幾らかでも寄り添い共有することが出来るならば、心の絆もより強くなろうかと考え、また風評被害で苦しんでいる地を訪ねて僅かでも応援できればとの思いから、この事業を立案しました。

訪問被災地：岩手県 (釜石市、陸前高田市)、宮城県 (女川町、石巻市、名取市)、福島県 (いわき市、原発立入禁止地域境界ゲート、風評被害地) などを訪問予定。この他行程途中にある観光地 (平泉、松島、会津若松など) も視察予定。

実施期日：2012年10月14日出発、11月4日帰国。(往復航空便は一応団体行動) この間、東北地域訪問：8日間、東京観光：1日間、個人自由行動：7日間。

### ※表紙から続く

また、県連を中心とした日系3団体の幹部は被災地に住む若者を伯国に招待する事業計画の立案に合意し、応援ツアーが各県庁を訪問する時に、その草案を投げかけることも決まった。

両者の間で合意がなされれば、来年の日本祭りの開催時期に合わせ、被災3県から一人づつ計3人を招聘し、約2週間の交流プログラムを実施する。対象者や負担費用などの詳細については、各県の要望を考慮しながら柔軟に対応するという。

訪問団の団長を務める本橋幹久さん (ブラジル日本都道府県人会連合の副会長) は「日系社会を代表する気持ちで臨みたい」と意気込み、招待事業についても「日本への恩返し気持ちはもちろん、実際の体験を当地で直接話してもらうことに非常に大きな意味がある。積極的な投げかけができれば」とその意義を語った。

(ニッケイ新聞 2012年10月12日付け記事より)



1996年長島藍子は、CISVのブラジル・キャンプに参加しました。

building global friendship

CISVは独立した非政治的で非営利の民間団体で、プログラムの実施や組織運営はボランティアによって行われています。国際事務局は、UNESCOに協力して活動しているNGOとして、あるいはヨーロッパ審議会に参加するNGOの一員として認められています。またCISVは1950年の創立以来、常に調査研究に重きを置き、異文化理解教育や体験型学習等に関する論文を多数発表しています。CISV日本協会は1957年に創立され、1987年に文部省 (現文部科学省) から社団法人として認定されました。現在、全国に4つの支部があります。

Within the different programs organized by CISV, one is the IPP (International People's Project). This is the project that was organized in Ishinomaki on August 2012. More than a year and a half had passed after the 'triple disasters' of March 11, 2011: the Great East Japan Earthquake, the tsunami and the accident of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station. It is very difficult to give an account of the damage, ruptures and changes that came along. Behind the statistics and those huge numbers of fatalities, losses and damages, there are real people with stories to tell and lives to keep on living. Thanks to CISV Japan many people had the opportunity to connect to some of these locals and to be part of the rebuilding process, creating spaces for resilience and empowerment.

CISVers in Japan and around the world felt that something had to be done after the disaster, and several actions took place: messages and photos showing support, different kinds of donations, a long-term project happening in Ishinomaki (Mosaic STEP) as well as two international minicamps: 2012 and 2013.

The IPP lasted for two weeks, had 16 volunteers from nine different countries (Austria, Brazil, Denmark, Egypt, Great Britain, Japan, Philippines, Portugal and Thailand), five local staffs (being three Japanese, one Colombian and one Brazilian).

The main part of the IPP was the international minicamp with the children from Ishinomaki. There were 50 children from 11 to 13 years old. The minicamp lasted for six days in the "National Hanayama Youth Outdoor Learning Center", a beautiful place surrounded by nature.

For most children, this was the first chance to participate in a camp longer than two or three days. It was also a unique opportunity to interact with foreigners, practice their English and be exposed to a multicultural environment.

A few months have passed, the staff of the STEP-IPP has been back to Ishinomaki for a reunion day with the children. Feedback from both children and parents has been received. Frequent comments have been: children's desire to study, learn and speak better English; their openness to foreigners and other countries/cultures; their new friends from Ishinomaki (outside their school environment), as well as the local parents' willingness to help CISV projects in the area in the future.

More results and maybe even "the real impact" of this experience might only be felt in the long term, as it happens with many other CISV programs. It's when children grow up, become world citizens, manage to approach life and its challenges with a different perspective that it allows us to understand the consequences of such project. Today, as part of the staff, I am very happy to have been able to help plant these seeds.

古市タウリ (日系ブラジル人、在日コスタリカ大使夫人)